

寧波石造物と日中海域文化交流

楊 建 華^{※1} 鄔 夢 茹^{※2}

はじめに

寧波石造物の石材の梅園石をめぐる日中海域文化交流の問題に初めて接したのは、2006年に広島大学の岡元司氏と共同で寧波東錢湖の史氏一族の墓群のフィールド調査をしたときである。かつて南宋時代の宰相であった史詔を埋葬した安樂山の山門から入ると、墓地の両側に多くの石造物が並べられていた。現代人より身長の高い文臣や武将などの石像や石馬、石虎などには共通の彫刻手法が確認でき、全体は視覚的に計算された配置で躍動感が漲っている。その制作に使われた石材は、南宋の初めに流行っていた青白い太湖石^①ではなくて、やや赤みを帯びた地元産出の梅園石であった。

史氏一族の墓の石像だけではなく、現地の寧波周辺保国寺前の唐代陀羅尼石経幢など、梅園石を使用した石造物は数多く残っている。

一方、日本の奈良県奈良市東大寺南大門前の石獅子や福岡県宗像市宗像大社阿弥陀経石、岡山県赤磐市の熊野神社に伝わり、岡山県立博物館に保存されている阿形獅子、さらには九州の西部^②を中心に分布している薩摩塔なども、浙江省産の梅園石によって、作成された可能性があり^③、寧波の石匠によって、日本に運送された石材の梅園石で造られたことが指摘されている。しかも、ただ石材が運送されたというのではなく、その個性的な彫刻技法も日本の職人に伝えられたようである。これは数多い日中海域文化交流の中でも注目すべき事例の一つであろう。

1. 梅園石に関する先行研究

梅園石をめぐる日中海域文化交流の問題は、これまでは供給側の中国よりも、受容した日本側の研究者の手で主に研究が進められてきた。本格的な研究の口火を切ったのが岡元司で、2006年12月に九州国立博物館で開催された国際シンポジウム「寧波の美術から海域交流を考える」において、筆者とともに行った東錢湖での現地調査の概要を発表し、問題の重要性を学会に紹介した。

近年、研究が進められているのが高津孝ら鹿児島大学の中国文化研究者による薩摩塔研究と、山川均ら近畿地方の文化財・考古学研究者による東大寺石獅子の研究である。2011年3月に上海で開催

※1 寧波大学外国語学院

※2 寧波大学科学技術学院

①青白い色を呈している彫刻石で、風化しやすく蘇州の岩石。

②高津孝「薩摩塔と礎石——浙江石材と東アジア海域交流」『江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘』.pp.213

③高津孝、橋口亘「薩摩塔小考」『南日本文化財研究』

No.7.2008年

(<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/handle/10232/15017>).

された国際日本文化研究センター・復旦大学共催のシンポジウム「江南文化と日本—資料・人的交流の再発掘—」では高津報告「薩摩塔と礎石—浙江石材と東アジア海域交流」が発表され、中国側にも大きな刺激を与えた。

山川（2012）^④では、中日石造物研究会による寧波や東大寺での現地調査をもとに、楊古城、大江綾子、佐藤亜聖、西村大造らが東銭湖周辺の墓前石像群や東大寺石獅子の紹介と検討、石材の加工技術や石造物の制作技法など、関係する領域を網羅する論説を執筆しており、梅園石をめぐる日中海域文化交流についての必読文献となっている。

一方、中国側の東銭湖周辺の史氏墓前の石像群についての研究については、上記の山川（2012）^⑤所収の楊（2012）^⑥の記述および佐藤（2012）^⑦の参考文献を参照していただきたいが、先行研究を総括した蔡（2005）^⑧の論考は、岡元司が日本語訳の解題および参考写真を加えてくれているので、利用しやすいものとなっている。

中国語による代表的な成果としては、現地調査をもとにした謝国旗による周辺の石造物を含めた報告（麻・謝2003）^⑨がある。史氏墓群の本格的な時代区分設定の試みとして林（2006）^⑩があり、南宋の彫刻については多くの写真をもとに論じた楊・襲（2006）^⑪がある。本格的に研究を行なうには、これらを参照することが不可欠であろう。

「薩摩塔」は、昭和30年代に斎藤彦松氏により、鹿児島県内の坊津で最初に確認・報告され、当初は鹿児島県内にも存在すると考えられていたためにこの名称“薩摩塔”が一般化した（高津・橋口2008）^⑫。しかしその後、九州北西部で発見が相次ぎ、高津（2012）^⑬が発表した薩摩塔類（薩摩塔・類薩摩塔）分布表によれば、現存数では長崎が最も多く、福岡・佐賀にかけて九州の西北部にも分布している。さらに断片も含めた調査では、福岡が最多となっている（井形2012）^⑭。

高津・橋口・大木（2010）^⑮では「中国産石材による中国系石造物という視点から」という副題の下で、石材が梅園石である可能性や薩摩塔の形態的定義が論じられている。この研究の2010年までの成果は上海でのシンポジウムをまとめた高津（2012）^⑯において総括され、こちらも国際日本文化研究センターによりウェブ上に公開されている。そこでは薩摩塔のほとんどが梅園石と認定可能であること、そして制作年代を12世紀から14世紀前半が中心であると推定し、中国で制作された後に、舶載されて九州各地に持ちこまれた可能性が高いと指摘している。本論では日中海域文化交流の媒介となった寧波石造物の存在を確認し、それが日本彫刻文化の発展にいかにか大きな影響を与えたのかを纏め、日中海域交流の重要性を改めて確認することを目的としている。

2. 寧波における梅園石の石造物

2.1 梅園石とは

梅園石を産出する寧波鄞江鎮の梅園村は、北東から南西に傾斜している寧波—泰順拗陷断裂層に

④山川均『寧波と宋風石造文化』（東アジア海域叢書10）汲古書院、2012年

⑤前掲書、注④山川均..

⑥前掲書、注④楊古城「寧波周辺の石造文化財」山川均所収。

⑦前掲書、注④佐藤亜聖「石材加工技術の交流」山川均所収。

⑧蔡罕、「宋代四明史氏墓群遺跡について」井上徹・遠藤隆俊編『宋明宗族の研究』汲古書院、2005年、pp.255

⑨麻承照・謝国旗『東銭湖石刻』中国文联出版社、2003年。

⑩林浩「寧波東銭湖南宋墓前石刻研究」『浙東文化』2006年第1期

⑪楊古城・襲国榮『南宋石彫』寧波出版社、2006年

⑫前掲書、注③高津孝・橋口巨

⑬高津孝「薩摩塔と礎石——浙江石材と東アジア海域交流——」山田奨治・郭南燕編『江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘——』国際日本文化研究センター、2012年（<http://publications.nichibun.ac.jp/ja/item/symp/2012-03-23/pub>）

⑭井形進『薩摩塔の時空——異形の石塔をさぐる』（花乱社選書4）花乱社、2012年、pp.146-151

⑮高津孝・橋口巨・大木公彦「薩摩塔研究」『鹿大史学』57号、2010年（<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/handle/10232/15018>）

⑯前掲書、注③高津孝。

属し、その石材は凝灰岩質で、非常に目が細かくて、硬質な石であるため、立体的、写実的な彫刻が可能な石材で、色調も梅のような紅色を呈し、高級な彫刻石材として珍重されている。現地の寧波周辺保国寺前の唐代陀羅尼石経幢や、東銭湖付近の南宋三代宰相に仕え大きな権力を振るっていた史氏一族の墓道両側にある文臣武将像、石馬石虎像などは、すべて梅園石で彫刻された石造物である。

日本のウィキペディアで「梅園石」を検索してみると、次のように解説されていた。梅園石は、中華人民共和国浙江省寧波市郊外に分布する凝灰岩。日本や朝鮮半島に石造工芸の材料などとして輸出された。用途は、灯籠、狛犬、船舶用バラストなど。このような石は淡い紫色を呈している細粉砂岩で、硬度（HM）が6.19、耐酸度（RH）が99.1%で、耐圧強度が131.4MPa、光沢のある穏やかで、目が非常に細かくて、硬度が彫刻にちょうど適する特長のある稀少な石材だとされている。

2.2 寧波周辺の唐宋時代の石造物

寧波市北西から13kmほど離れた靈山の中腹に位置している保国寺は、東漢に建てられ、唐広明元年（880）に「保国」の額を贈られたが、宋治平元年（1064）には「精進院」に改称され、現在また、「保国」という名に戻った寺院である。寺内中心の大雄宝殿建築はすべて木材で作られ、特に全部の結構が斗拱で連結され、東から西までわざと斜めに建てられたため、千年以上にわたり風雨地震に晒された後でも傾いたり倒れたりした形跡が見えず、最古の木材結構建築として貴重な文化財と言える。更に大殿の中も、鳥の巣や蜘蛛の巣や虫食の形跡などが不思議なほど一切なく、中国江南地区の最古木材建築として、1961年3月には中国国務院によって最初の全国重要文化財に認定されている。

現在、寧波保国寺天王殿の前に立っている唐代の二幢陀羅尼石経幢は、高さが4m近くあり、非常によく保存されている。東側にある経幢は、唐開成四年（839）に建立され、幢座、幢身、幢頂からなっていて、それぞれ八角に成形されている。幢座という基礎は須弥座式で、八角に壺門があり、その中には、また仏像が刻んである。幢頂の縁には、盤龍と仰蓮が刻んであり、幢身にも、陀羅尼経が刻んである。幢頂が祥雲のある石蓋に覆われ、その上に石頭の天辺があるはずだが、現在は欠けている。この石幢は非常に古い形式で、均整がとれており、考古学的に高い価値を有している。元々は寧波市慈溪の普濟寺が所蔵していたもので、その幢頂や幢身及び基礎には、すべて梅園石が使用されている。西にある経幢は、大中八年（854）に建てられ、やはり八角を呈しているが、幢座や幢身の割合は東の経幢に及ばない。もともとは鄞県の永寿庵の所蔵であって、『鄞県志』によると、「尊勝経」が刻まれているが、時代の経過により、文字が磨り減って、はっきりしていない^①。保国寺に所蔵されている南宋の石馬も、たてがみが頭から流れ、目玉がはっきりとして、手網を引っ張られて、生々しい表情を見せている。その淡い梅色を呈する石馬の石材はあきらかに梅園石である。これは、おそらく梅園石という石材で造られた中国最古の作品であろう。

2.3 明州周辺貴族墓前石造物

唐の玄宗開元二十六年（738）に、現在の寧波の地に、明州が開かれたが、それは四明とも呼ばれていた。東に四明山が聳えているため、その名をとって、名づけられた地域名である。南宋の光宗紹熙五年（1194）、明州は慶元に改称されたが、明の太祖元年、慶元は元代を祝う恐れがあったため、明の太祖洪武十四年（1381）に、寧波という名で呼ばれるまでは、明州という名前が再び利用されることになる。

南宋期の明州は、豊化、慈溪、鎮海を管轄していた。現在、豊化溪口鎮にある飛鳳山の南宋宰相魏杞墓前に石像群が存在している。この中で、石虎だけは当時のものであるが、その他の石像は、補修されている。また、豊化蕪湖許家山に、南宋大理寺卿舒滋のお墓があり、その墓前には五つの石像が

^①郭黛姮『東来第一山保国寺』文物出版社、2003年、pp.127

現存している。慈溪の観海衛鎮解家村に、南宋戸部尚書袁紹の墓前には武将、石虎が現存し、南宋牌樓の柱頭も発見されている。そのほかに、慈溪上林湖南東部にある東錢湖史弥大夫人の墓前では石像の武将が一尊発見されている。余姚市梁弄鎮西壘村には、南宋大理寺少卿孫大年父子の墓前に、石像武将、石像文臣の二尊が現存している。同じ余姚市大隱鎮には、南宋吏部尚書汪大猷墓前に、石馬、石虎、石羊及び石筍が現存している。上虞市の曹娥廟には、石像武将が一对収蔵され、三門県博物館には南宋晩期の宰相葉夢鼎の墓前にあった石像武将が二体収蔵されている。永嘉県廊下村には、南宋朝請大夫の朱直清墓前に石虎、石羊、石馬、石像文臣、石像武将が現存している^⑱。これらの石像は時代の流れによって、それぞれ紅砂石、太湖石、梅園石を素材として造られたものである。

2.4南宋史氏一族の墓道両側の石像群

1127年、北宋が滅び、宋徽宗の九男趙構は商丘に皇位を譲ったが、その後、都を臨安（現在の杭州）に遷した。北宋の皇族や貴族の多くは遷都に伴い南遷して、北宋の晩期、明州の人口は北宋初期に比べ4.4倍に激増した。明州の姓氏の半数以上は、北方から移住してきた者たちであることが分かっている。そのうちの四明史氏は明州にした移住した後、隆興二年（1164）に、史浩は宋の孝宗趙昚の宰相を初めて務め、その子史弥遠は、光宗趙惇、理宗趙昀の二十六年間に亘って宰相を務め、天子を補佐して、国政を管掌した。また、史浩の孫である史嵩之が宰相の位に就くと、再び史氏の姻親であった鄭清之が位を継ぎ、史氏一門三宰相、四世二封王、五尚書、七十二進士を輩出した。

寧波市内から東、15km程のところ広大な東錢湖がある。広さは杭州の西湖に比べ三倍の面積であり、南西に青山をひかえた、浙江省では最大の淡水湖である。この東錢湖には唐天宝三年（744）、鄞県県知事の陸南金の発案で、堤防が造られ、そのあと、歴代の県知事の王安石、李夷庚、呂猷之等によって堤防が増築され、現在の総合的に利用できる水域となった。その青山の中に点々として丘が連なり、それらの丘には、それぞれ南宋時代の有力貴族であった史氏一族の広大な墓地在している。各墓地の墓道の前に石造牌樓、石造跪羊、石虎、石馬、石造武将、石造文臣が立てられ、それらの間には石椅子、石筍も置かれている。

これら南宋時期の石像群の傑作として注目されている東錢湖石造群は、寧波市鄞州区文物弁公室室長を務める謝国旗や楊古城によって、周辺の石造物も含め、すでに知られていたが、日本で史氏一族の石像群を報告したのは、広島大学で南宋を研究していた岡元司である。岡氏は2006年に科研費研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（通称「にんぷろ」）の一環として、筆者と一緒に、寧波鄞州区郊外で南宋寺院を現地調査した際、墓地にある墓誌銘に着目し、両側にある石像群を発見して、調査報告することになった。

2.5南宋石造物の特徴

南宋史氏一族墓道の牌樓から奥に向かい、それぞれ「忠、孝、節、儀、勇」を意味する石材で「羊、虎、馬、武将、文臣」が並んでる。形としては、「跪く羊、しゃがむ虎、立つ馬、剣をつく武将と笏を持つ文臣が現れ、動物が跪く、しゃがむ、立つ、そして人間が立つ姿勢に至るまで、遠くから見ると、徐徐に上がるという芸術的な視線の動きが演出されている。この五つの石造群からは埋葬された人物の魂の存在という神秘的な意味が暗示されている。その一方で、石造の牌樓、椅子、橋梁、東屋などのアクセサリも、飾りつけや美化などの引き立て役をしており、そこには、単なる埋め草の役割を越えた演出がなされている。

史氏一族の石造群は線状に全体的な形が整えられ、彫刻手法を総合的に用いることで、柔らかくリズムをもって流れるような美しさに富み、美術界で流行っている「呉帯当風」^⑲の様相を呈している。

⑱前掲書、注④山川均、pp.89

⑲唐代呉道子（686-760）の人物絵の描写

石匠たちはまず立体彫刻の手法により、大きくて力強い鑿で、石造対象の輪郭を荒削りし、その後、ニーズに応じて、少しずつ滑らかに整形している。一般的に石造の文臣は浅い浮き彫り、石造の武将は高い浮き彫りがそれぞれ施され、そのあとは、ライン彫りで彫刻されている。また、石造の虎や石造の馬のたてがみもライン彫りで、馬の鞍はまず、その形の輪郭を刻んで、それから必要なところを少しずつ彫っていく浅い浮き彫りなどの彫刻手法で刻まれている。

南宋石造の鞍馬は、唐の風格と仏教的な特徴を帯びていて、まさに文字で表現するような生々しい原始的な図案だ。たとえば、使われているシルクは飄逸的な動態感覚が強調されており、墓地の主人公の富裕な地位を表している。波と戦っている海獣には努力精神が託され、滔々たる海は、福は東海のように延々と続く意味で、山石に植えている「さいわいたけ」は寿命が南山の松と同じぐらいの長生きを、「はすの花」と「ざくろ」は清める土、子孫多幸を、ボタンは贅沢富裕を、「すいかずら」は子孫の永続を表している。皇族陵の彫刻が、国家繁盛の意味を象徴しているのに対し、史氏の墓地彫刻は、一族隆盛を表していると言えるであろう。芸術面から見ると、石馬の口、鼻、眼には質感があり、生き生きとして、800年の風雨に曝されても、頬の輪郭ははっきりしていて、馬のたてがみには振られた首の動きに応じた躍動感がある。

同じ鞍馬でも時代によって変化があり、史氏二代目史漸墓前の石馬は、頭を上げ、待機する様子であるのに対し、史弥遠母親の墓前の石馬は、頭を垂れ、うやうやしく起立する様子である。史宗之墓前の石馬は、傍観する様子で、とくに六代目史文孫の墓前の石馬は、後ろを振り向き、昔の主人を懐かしんでいるようであり、少しばかり開いている口はうそぶいているようにも見え、その自然で生き生きとした姿は人を感動させる力を持っている。

石虎は、まろやかで頑丈な体格が、本真な虎に似ていて、奔放なラインは簡潔だが、その起伏している曲線は躍動的な「W」のように見え、雄と雌はそれぞれ違っている。虎の頭や体にところどころにせり出した丸みや柔軟なカーブ、彫刻された柳の葉としま模様で虎の体の特徴を強調している。北宋皇族陵の虎に比べ、史氏一族の石造虎はより精細で、機敏で、謙虚のように見え、いまにも動きそう、飛びかかりそうな姿勢である。特に蛇の尻尾に似ている虎の尻尾はや躍動感が極めて強く、無声の耳、目つき、鼻、唇に対して、明らかにコントラストを形成している。

3. 日本における梅園石の石造物

3.1 東大寺南大門の石獅子

治承四年（1180）12月28日、平重衡軍の南都焼討ちにより、東大寺は壊滅的被害を受けた。その半年後、つまり治承五年（1181）6月26日に、朝廷から復興の知識詔書が発布され、同時に藤原行隆を長官とする造寺官が任命された。しかし、当時の社会情勢は、天候不順による飢饉が蔓延し、諸国では謀判が相次いでいる状態で、東大寺の復興にかかる費用を集めることは難しい状況であった。東大寺復興は、当初よりその経済側面で、大きな問題を抱えていた。そこで、勸進職に任命された俊乗房重源（1121-1206）は当時61歳で、一輪車を六両製作し、同志らとともに、七道諸国を勸進して、百姓から尺布、寸鉄、一木、半銭の喜捨を募り、東大寺の費用を徴した。しかし、問題は経済的な面だけでなく、大仏鑄造や木像彫刻や石造彫刻などの技術の問題もあった。「東大寺造立供養記」では、次のように記されている。

建久七年（1196）、中門石獅々〔子〕、堂内石脇士〔侍〕、同四天像、宋人字六郎等四人造之、若

日本国石難造、遣価直於大唐所買來也、運賃雜用等凡三千余石也^②。

本史料によれば、建久七年（1196）に製作された石像は、中門石獅子一對のほかは大仏の脇侍二体と大仏殿内の四天王像四体であった。だが、このうち現存するのは石獅子のみであるが、位置は中門ではなく南大門の北側に通路を隔てて、二体が北向きに置かれている。

当時作成された石造物としては、東大寺石獅子二体の他に、大蔵寺層塔、般若寺層塔、東大寺法華堂石灯籠、さらに大野寺弥勒磨崖仏もこの中に入れることができる。石像は日本産の石では造り難いので、中国で買い求めて日本に運んだとの記述がある。これは中国から石材を運んだことをと裏づけている。その時に製作された石像の中では、石獅子のみが現存している。そのほかは永禄10年（1567）の兵火で焼失し、石獅子も中門から南大門に移動されたと考えられている。

この石造獅子は高さ1.4mの台座に置かれ、東西一対で、像高は東方の像が1.8m、西方の像が1.6mである。この石造獅子の製造者は、中国明州の出身者の伊行末である可能性が高い。

伊行末の年表は次のとおりである。

建久七年（1196）、宋人字六郎（伊行末のことか）東大寺の中門獅子、堂内石脇士、四天王石を造る。

延応二年（1240）大蔵寺（宇陀市）石造十三重層塔を造る。層塔銘文：延応二年庚子二月四日造、大工、大唐銘州伊行末。これより以前に般若寺十三重石塔の造立に着手。

建長五年（1253）般若寺十三重石塔「（建）長五年癸丑卯月八日奉籠之」の墨書。

建長六年（1254）東大寺法華堂（三月堂）石灯籠銘：敬白奉施入石灯籠一基、右志者為果宿願所、奉施入之状如何。

建長七年（1255）のど地藏（奈良市月ヶ瀬大字桃香野字野堂）銘：當來導師弥勒仏建長七年（伝伊行末作）

正元二年（1260）死去。

弘長元年（1261）伊行末の嫡男行吉が、父の一周忌にあたり卒塔婆2基を、1基は父の菩提を弔い、別の1基は存命の母の善行のために建立した。銘文は下記のようなものである。

先考宋人行末者異朝明州住人也、來日域經歲月即大仏殿石壇四面回廊諸堂垣場荒蕪、悉毀弧為、癸吾朝、陳和卿為鑄金銅大仏以明州伊行末為衆殿、石壇故也土匪直也口者也則於東大寺靈地辺土中得石修造正元二年七月十一日安然逝去彼嫡男伊行吉志、元年建立一丈六尺石卒塔婆。

北塔：「孝養父母心、功德最大一、是心發起者、成就自然智」「當來証涅槃、永斷於生死、若有至心聽、常德無量樂」。

南塔：「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」「於一切、不生懈怠心、十方大菩薩、愍衆故行道」^①。

また、『奈良六大寺大観第十一卷東大寺三』の石獅子の東西像の違いに関する解説には、次のようにある。

作者の相違あるいは師弟関係にあるものの分担製作のためと解し、同時に一具として当寺南中門に安置されたと見るのが穏当な見解であろう。しかし、両者の表現の相違、法量の差、ともに阿形であることなどを併せ考える時、まったくの想像に過ぎないが、鎌倉時代再建の大仏殿院の南中門および北中門に作風を異にする各一対の石獅子があり、そのおのおのの阿形だけが残ったと見ることはできないであろう^②。

東西像のいずれもが、左脚の表現が丁寧で、脚の丸みを表現しているのに対して、右脚のほうは平

^②前掲書・注④山川均、pp.306

^②前掲書・注④山川均、pp.264

^①黒田寿郎・狛犬紀行、東京・文芸社

坦に断面V字の溝を掘り込んだだけのやや粗雑な表現になっている。東西両像の後脚部の胴部からの彫り出しの様子を示したように、いずれも左脚の突出が大きく、右脚のほうが小さい。このことは史氏一族の墓前石像、特に石像群の中の石羊の脚部表現との違いを比較するなら、東西部のいずれも左面が表で、右面が裏と言えるであろう。また東大寺の東西両像とも、頭弧から胴弧にかけての谷底ラインはU字状のカーブを呈している。この尖りのないカーブは、史氏一族墓地前の虎の背中のラインに非常に近い。

石造獅子の詳細な石材鑑定の結果、石材は凝灰岩で、粒子や形状などが寧波の郊外で産出される梅園石と違いがないことが判明している。

重源らが明州に滞在していたとき、南宋の宰相である史浩に謁見した可能性が高いと思われる。

3.2九州薩摩塔について

最初に目にした薩摩塔は鹿児島県の川辺にある水元神社の社殿の左側に立っている石塔であった。造形は洗練度の高いもので、平面と平面の境は、きりりと真っ直ぐな稜線をなしていて、曲面は、過不足や偏りなく丸みを帯びていた。四天王の巧みな浮彫の表現も目を引いた^③。

薩摩塔に刻まれている四天王像は、日本では珍しく、剣先をまっすぐ地面に突き立てる姿をした像はよく見られるが、中国史氏一族の墓地前の石造武将も手に持っている剣の先を地面に向け、まっすぐ地面に突き立てて、さらに東銭湖南宋石刻公園にずらりと並んでいる石像武将の前に立つと、薩摩塔の故郷に来ているような気がすると井形進氏は感慨を述べている^④。日本人の信仰の中で、日本人の手によって作り出されたものとは考えにくい。

薩摩塔と通じる形態や構成をもち、源を共有する可能性がある石塔が寧波にかなり存在していることは事実なようである。薩摩塔が中国製である以上は、いずれ中国のどこかからも同じような塔が出現するはずである。

薩摩塔の背景について考えてみる。この薩摩塔がどのような人の、どのような信仰を背景にしたのかも考えてみよう。まず、十三世紀前後、入宋僧などの留学僧、あるいは、宋から渡来した渡来僧が想定されるだろう。そうだとすれば、文化は僧侶、商人は商品、と考えられがちであるのは事実であろう。だが、薩摩塔の場合は、もし留学僧や渡来僧などの人たちが移入の主体であったとすれば、九州以外の地方からも、薩摩塔が見出されるはずである。九州のみならず、当時、政治、経済の中心地であった京都や鎌倉の各地の要所から、薩摩塔が見出され、また中国においても、彼らがよく往来した杭州や寧波の寺院からも、見出されるだろうと想定されよう。だが、現実はそうではない。

薩摩塔の信仰の主体が、中国から渡来した人々と想定されるとしたら、それは間違いなく中国人商人であろう。これは、同じく中国に源をもち、僧と結びついて、九州にとどまらず列島を東へ向かい、京都や鎌倉にも広く展開することになった無縫塔と、まさしく好対照をなすと言える。薩摩塔は、中国人商人たちの祈りにかかわる宗教施設の一例だと言えるのではないか。

石塔がほとんどの場合、お寺の前に置かれ、四天王も側面の壺の中に彫刻され、それぞれ個性をもって、表現されているところから、仏教的なものとして意識している人が多いことは間違いない。しかし、薩摩塔は塔身を背面から見ると、壺形の姿をしている。実は、壺といえば、中国では、実用の器であるのみならず、道教ないしは神仙思想の中において、象徴的、宗教的な意味を備えている。壺は、その中に神仙世界を秘めていて、すなわち、神仙世界そのものの象徴である。もっとも著名なのは『神仙伝』と『雲笈七籤』に書かれた神仙世界である。『神仙伝』では、天界から人間界に流された仙人である壺公に導かれて、彼が毎晩飛び入るところの壺の中に入った費長房は、そこに、壮麗な宮殿が

③前掲書・注⑭井形進 .pp.36

④前掲書・注⑭井形進 .pp.24

聳え立派な道が通った神仙世界が広がっているのを目にする。つまり、壺は神仙世界そのものだったである。『雲笈七籤』でも、施存という道士の話に、やはり神仙世界を秘めた壺が登場するが、その中も現実世界のように太陽や月があり、神仙世界の天地が広がっている。時折日本でも見かける「壺中天」、「壺天」という言葉が、仙境という意味に由来しているというのは、中国における壺と神仙世界との深い関係を背景にしたものである。そうになると、薩摩塔の壺形の塔身は、塔の背景に仏教のみならず、もっとも中国的な思想と言える道教ないしは神仙思想が存在していることを示すものではないだろうか。そのような世界こそ、薩摩塔に関わる信仰の主体と想定される中国人商人たちの信仰の対象にふさわしいものであろう。

4. 寧波石造彫刻文化より日本への影響

史氏一族の石像武将の剣先の持ち方を通して、九州を中心に日本に残る剣先を地面に突き立てるような姿をした石像あるいは木造の神形立像。あるいは薩摩塔のような石塔。法具、各種容器などの工芸作品のような器物に現れる仏像表現などから、南宋渡来彫像の影響を見て取ることができるように思われる。

中国式の仏教が日本に伝わる際に、木造の建築も日本に伝わり、明州の木工、石工職人も共に日本に渡って来た。彼らは鄞県（今の鄞州区）陳和郷、陳仏寿、伊行末などの職人であり、日本奈良の東大寺に置かれている盧舎那大銅仏などの修繕に協力している。重衡の乱で消失した東大寺が修繕不可と鑄造職人に判断されたため、法皇は、三度宋に渡り建築経験にも富んだ醍醐寺僧侶重源和尚を召してその勸進を命じた。

陳和郷は総鑄造師として、日本の鑄造師草部是助らと七ヶ月の努力で大仏を修復し、東大寺を再建した。それだけではなく、伊行末などの職人は東大寺の南門に、鄞県製の梅園鎮寺獅をも建立した。その壮挙は当時全日本の注意を引くものであった。

史氏が獅子を彫刻しなかったのは恐らく獅子の野性は最高至上の皇帝の権力の象徴と思ひ憚ったためであろう。そのため伊行末のような腕の良い職人でも中国では獅子を彫刻してはいない。彼は東大寺の獅子に自分の自由な発想を託し、「天に向かって吼える」という形で、自分の心の底に潜む怒気を発散している。そして日本鎌倉時代に奈良般若寺に納められた伊行末の作品の十三重石塔は、東銭湖二壺塔とひさしの彫刻方法が基本的に同じものである。

その他に岡山熊野神社に保存されている阿形獅子は、造型面でも彫刻技術面でも鄞州の明朝石獅に酷似している。

東銭湖の石彫刻文化は史氏一族の輝かしい石刻史を表しているのだけではなく、様々なルートでの日中文化交流史の源泉の一つとなっており、日本の石刻、仏教、建築などの文化の発展に決定的な影響を与えてもいると考えられる。

おわりに

上述したように、寧波郊外で産出する梅園石は、南宋時代の史氏一族の墓前石造物の材料としてだけでなく、日本の東大寺南大門の両側に立っている石獅子の材料や九州南部に広く分布している薩摩塔の材料でもあることが明らかにされている。そして梅園石とともに技術者が海を渡り、鎌倉・室町時代の日本に高度な彫刻技術を伝えたこと、さらには薩摩塔に代表される独自の信仰が中国人海上

商人により日本にもたらされたことが、次第に分かってきた。

しかし研究の歴史はまだ浅くて、寧波石造物をめぐる日中交流の研究には見落とされている点が多いであろう。交流の実相を明らかにする重要な要素として、さらに多くの研究者が注目し、議論に参加して下さることを期待したい。新たな発見や解釈を実現するというのは、これまでの日中の歴史学が繰り返し経験してきた事実である。

参考文献

[日本]

井形進『薩摩塔の時空——異形の石塔をさぐる』花乱社.2012

黒田寿郎『狛犬紀行』文芸社.2005

蔡罕「宋代四明史氏墓葬遺跡について」『宋明宗族の研究』汲古書院.2005

高津孝「薩摩塔と礎石——浙江石材と東アジア海域交流」『江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘』国際日本文化研究センター.2012

高津孝・橋口亘・大木公彦「薩摩塔研究」『鹿大史学』57号.2010

山川均『寧波と宋風石造文化』（東アジア海域叢書10）汲古書院.2012

[中国]

郭黛姮『東來第一山保国寺』文物出版社.2003

麻承照・謝国旗『東銭湖石刻』中国文聯出版社.2003